

「暴力と形而上学」から政治論へ

早稲田大学文学研究科表象・メディア論コース修士課程 内川貴司

本ワークショップの最終部では、ジャック・デリダ「暴力と形而上学」（1967）におけるエマニュエル・レヴィナスへの批判から、その後のデリダにおける暴力論、政治論についての展開をみていくことで、一般的に1990年代に「政治的転回」をしたと言われるデリダが、その初期においてから一貫して政治、倫理的な問題へアプローチをしていて、またそれが脱構築において必然的であったということを見ていく。デリダはこの「暴力と形而上学」において、フッサール現象学の読解を介して、レヴィナスの哲学における、他者の純粋性、倫理の純粋性をあぶりだし、批判をおこなっている。たしかに、倫理における規範的な効力というのは、現実における合理主義や実証主義に対して、絶えず監視し、再審にかけるような批判性を持ちうるという点で非常に重要である。しかし、倫理について語る時、その規範的効力をあまりに強調しすぎることは、つまり倫理を純粋化し過ぎるということは、その倫理の領域を聖域化し、現実における政治との間にある断絶、裂け目を強調することとなるだろう。そのことによって、結局政治においては合理主義や実証主義は呼び戻され、政治的な居直りを許し、また反対には、その純粋性により倫理的精神主義などが引き起こされてしまう可能性を呼び招くと言えるだろう。しかし、デリダはレヴィナスの語るような純粋な他者の倫理というものは、具体的な政治の基礎付けとしては機能しないことを強調したまま、その一方で政治や法に介入する力を持つことも同時に主張するのである。つまりそのことにより、政治と倫理の関係、法/権利と正義の関係、つまり制度と理念の関係という次元において倫理は語られなければならないものであると主張するのである。